OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	現代日本語における形容詞の研究
Author(s)	Dragana, Špica
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49474
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏名	Dragana Špica（ドラガナ　シュピツァ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２３２３７　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	**現代日本語における形容詞の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　仁田　義雄 （副査） 教　授　小矢野哲夫　　教　授　三原　健一　　准教授　堀川　智也 准教授　筒井　佐代

論文内容の要旨

本研究は、現代日本語の形容詞を考察・分析し、新たな形容詞分類を提案するものである。ここでは形容詞の述定用法ばかりでなく、副詞的用法も考慮に入れる。また、本研究では形容詞が表す語彙的意味について、語彙意味論の観点から考察・分析を試みる。

従来の語彙意味論においては、語彙的アスペクトを持ち、主体動作や状態変化を含む多様な事象を表し得る動詞述語が主要な研究対象とされてきた。一方形容詞は、事象の中でもっとも基本的なものである「静止状態」を表すものとして一括され、さほど取り上げられることはなかった。その理由として、日本語の形容詞述語は動詞と違って、その項構造を一義的に確定することが必ずしも容易ではないことが指摘できる。

ここでは、従来の記述的研究における、日本語の形容詞を〈属性形容詞〉と〈感情形容詞〉の二つに分類する基本的立場を受け継ぐ。また、従来、語彙意味論で「静止状態」とされてきたものを〈単一状態〉と〈複雑状態〉に区別する。英語の形容詞述語は〈単一状態〉しか表せないのに対して、日本語の形容詞述語は〈単一状態〉だけでなく、〈複雑状態〉も表すことができることを明らかにする。

その議論の過程で、属性を表す形容詞述語は、その意味構造において意味述語BEのみを含む〈単一状態〉を表すのに対して、感情・感覚・認識を表す形容詞述語は、〈複雑状態〉を構成する上で、意味述語BEのほか、本論文で新たに提案したFEELも含むと主張する。意味述語FEELの構造上の主語xは経験者であり、項構造の外項に結び付けられるのに対して、BEの構造上の主語yは対象であり、内項に結び付けられる。ここで重要なのは、〈属性形容詞〉を述語とする文が必ず〈単一状態〉を表すわけではなく、また、〈感情形容詞〉を述語とする文が必ず〈複雑状態〉を表すわけではない、ということである。

以下に〈単一状態〉と〈複雑状態〉を表す形容詞述語の相違を示す。

（01）花子は美しい。　　（対象の属性）　　〈単一状態〉
[SIMPLEX STATE x BE AT- *うつくしい*]
（02）花子は優勝が嬉しい（らしい）。　　（経験者の感情）　〈複雑状態〉
[COMPLEX STATE x FEEL [SIMPLEX STATE y BE AT- *うれしい*]]

また、感情形容詞はさらに意味的・統語的観点から〈感覚形容詞〉〈狭義感情形容詞〉〈広義感情形容詞〉の三タイプに分類する。まず感覚形容詞は、身体の感覚を表し、対象項として身体の部分を取ることができるという主要な特徴を分類の根拠とした。感覚形容詞以外の感情形容詞の分類の際には、様態のソウダを接続した形容詞述語がどのような意味を表すかを考察した。〈広義感情形容詞〉は様態のソウダを接続した形で経験者の感情のほか、対象の属性をも表すことができる。一方、〈狭義感情形容詞〉は経験者の感情は表すが、対象の属性は表し得ないものである。以下に広義感情形容詞「面白い」と狭義感情形容詞「嬉しい」を例に、この事実を確認しておく。

（03）花子は　嬉しそうだ。　〈狭義感情形容詞〉
[COMPLEX STATE x FEEL [SIMPLEX STATE y BE AT- *うれしい*]]　　（経験者の感情）

（04）花子は　面白そうだ。　〈広義感情形容詞〉
[SIMPLEX STATE x BE AT- *おもしろい*]　　（対象の属性）
[COMPLEX STATE x FEEL [SIMPLEX STATE y BE AT- *おもしろい*]]　（経験者の感情）

広義感情形容詞がソウダを接続した形で経験者の感情と対象の属性という二つの解釈を表し得ることは、その形容詞が二つの意味を持つことを示唆していると考えられる。

狭義感情形容詞は基本的に一つの語義を持つのに対して、広義感情形容詞は感情と属性の二義を持つ形容詞である。狭義感情形容詞と広義感情形容詞との相違は、述定用法ばかりでなく、連用修飾用法においても観察できる。

さらに本研究では、属性形容詞を〈狭義属性形容詞〉と比較的少数のメンバーからなる〈広義属性形容詞〉に分類する。〈広義属性形容詞〉は単独で述語となる場合、主体の感覚・認識など内面的状態について言及できないにもかかわらず、副詞的用法において、あるいはソウダを接続した述定用法において経験者の内面的状態に言及できるようになるという興味深い特徴を持つ。

（05）太郎は　迷惑だ。　　〈広義属性形容詞〉（太郎＝「対象」）
[SIMPLEX STATE x BE AT- *めいわくだ*]　　（対象の属性）

（06）太郎は　迷惑そうだ。　〈広義属性形容詞〉（太郎＝「経験者」）
[COMPLEX STATE x FEEL [SIMPLEX STATE y BE AT- *めいわくだ*]]　（経験者の感情）

以上のように、主体の感覚・認識という解釈が成立することは、広義属性形容詞の語彙概念構造においてFEELがあることを示唆していると考えられる。これらの形容詞が示す振る舞いは周辺的であると思われるかもしれないが、日本語の形容詞述語の意味を分析する上で、重要なデータだと考える。

以下に、動作主認識の副詞的成分を含む文の概念構造を示しておく。以下の鍵括弧で括った概念構造における点線は、必須成分ではないことを表す。

（07）花子はハムサンドを<u>おいしく</u>食べた。　〈動作主認識の副詞的成分〉

[花子　ACT ON- ハムサンド
EVENT [WITH [COMPLEX STATE 花子 FEEL [STATE ハムサンド BE AT- おいしい]]]]

花子が動作主であると同時に、経験者でもあるという分析である。広義属性形容詞のほとんどは様態のソウダを伴ってはじめて動作主認識の副詞的成分として機能できるようになるが、「おいしく食べる」「興味深く読む」など、ソウダなしでも可能なものもいくつか見られる。

動作主認識の副詞的成分の考察に関連して、この成分が出現する下記のような「特徴づけの可能文」について議論する。

（08）中学生にとって、この本は面白く読める。〈特徴づけの可能文〉

特徴づけの可能文は、先行研究のKuroda（1987）が “the tough type of *eru* sentence”（-eru 難易文）と呼称したものに対応し、この可能文が能力の可能文とは異なるのか、またどのような概念構造を持つのかについて分析する。

本研究で新たに提案する語彙概念構造上の抽象述語FEELは、状態述語の概念構造を記述するものであるため、そのまま心理動詞の概念構造を表現できない。一方、認識動詞構文は、認識活動を表すものとして、動作を表す意味的要素と、認識を表す意味的要素の両方を含む構文だと考えられる。形容詞の連用形を必須成分とする認識動詞構文の概念構造は、以下のようなものだと思われる。

（09）太郎は次郎の行動を不審に思った。

[太郎　ACT ON-　次郎の行動
EVENT　[WITH [COMPLEX STATE 太郎 FEEL　[STATE 次郎の行動 BE AT- 不審だ]]]]

本研究の構成は次のとおりである。第一章ではまず、本研究の基本的立場を示し、語彙意味論の基本的な考え方について説明する。また、日本語の形容詞述語の考察にあたって、項構造の認定が容易ではないこと、形容詞述語が複数の解釈を持ち得ることを指摘する。そして、感情・感覚・認識など、経験者の内面的状態を表す形容詞述語は〈複雑状態〉を表すと仮定し、概念構造においてFEELで表示される複雑状態には、〈単一〉状態が埋め込まれている、という分析を提案する。西尾（1972）が「属性的用法」と呼称している（10）のようなものは、感情形容詞の〈総称的用法〉であると説明する。

（10）インフルエンザの予防注射はいたい。西尾（1972:34）　〈総称的用法〉

第二章では日本語の先行研究の成果について議論した後、感情形容詞は、項構造において外項を持つのに対して、属性形容詞は外項を持たないという形容詞の新たな分類を提案する。ここで提案した形容詞分類は、形容詞の意味的特徴と統語的特徴を反映したものであり、下記のようにまとめられる。

日本語の形容詞
- （甲）感情形容詞
  - （甲1）感覚形容詞
  - （甲2）狭義感情形容詞
  - （甲3）広義感情形容詞
- （乙）属性形容詞
  - （乙1）狭義属性形容詞
  - （乙2）広義属性形容詞

狭義感情形容詞と広義感情形容詞の相違は、様態のソウダを接続した述定用法だけでなく、副詞的用法、そしてある程度連体修飾用法においても確認できる。こうした振る舞いの違いは、狭義感情形容詞が経験者の感情という、基本的には、一つの語義を持つものであるのに対して、広義感情形容詞は経験者の感情と対象の属性という二つの語義を持つことを表していることによる。また、感情形容詞の一部と属性形容詞の一部が副詞的用法において〈動作主認識の副詞的成分〉として機能することを述べ、こうした成分の記述・分析を行う。続いて、属性形容詞の振る舞いについて分析し、二分類を提案する。

第三章では、日本語の副詞的成分の体系の中で、形容詞による副詞的成分がどのような意味を担い得るかを考察し、動作主認識の副詞的成分の位置づけについて議論する。〈動作主認識の副詞的成分〉は〈主体の心理的状態の副詞的成分〉とともに〈主体の内面的状態の副詞的成分〉の下位区分であり、〈主体状態の副詞的成分〉に属するものとして考える。一方、この〈主体状態の副詞的成分〉は、〈様態〉や〈結果〉などを表す副詞的成分と対等の関係にあると考える。また、「悲しく描く」「つまらなく紹介する」のようなものを取り上げ、様態の副詞的成分の周辺的なものとして位置づける。続いて、特徴づけの可能文について考察し、そこに出現する形容詞連用形がこうした可能文の成立にとって、重要な役割を担うと主張する。また、認識動詞構文の基本的特徴について述べ、新たな分析を提案する。

第四章では、形容詞という語類が日本語の品詞体系においてどのような位置を占めているのか、その形態的特徴、〈基準の相対性〉〈程度性〉〈二極性〉など主要な意味的特徴について、記述する。続いて、形容詞が文の成分としてどのような機能を果たすのかについて概略を述べ、具体的なテクストを対象に行った調査の結果を挙げる。収集したデータからは、属性形容詞は連体修飾を主な機能とするが、感情形容詞は述定用法において出現しやすいという傾向が観察され、先行研究の仁田（1998）と同様の結果が得られた。それと同時に、会話文において属性形容詞の述定用法と連体修飾用法がおよそ同じ割合で出現するということに注目し、地の文の分布との相違を指摘した。

終章では、論文の結論と今後の課題について述べる。

論文審査の結果の要旨

『現代日本語における形容詞の研究』と題された本博士論文は，現代日本語の形容詞の新しい下位類化を提案し，その妥当性を証明しようとしたものである。

日本語文法の研究においては，動詞の分析・記述はかなり行われ，様々な成果を生み出しているものの，形容詞に対しては，本格的な研究の蓄積はさほど多くない。本論文の評価すべき点のまず第一は，研究の手薄だった領域・対象に対して，一貫した枠組みで包括的な分析・記述を試みたところにある。

分析・記述の包括性は，まず，取り上げられ分類の対象とされた形容詞の語数の多さに現れている。イ形容詞は所属語数の多くない品詞である。本論文では，イ形容詞・ナ形容詞あわせて約500の語を取り上げ，その全体を，自らの提案した下位類にしたがって，実際に分類し所属させることを試みている。さらに，属性形容詞については，Dixon(1977)を参照しながら，物理的特徴に関するもの［色彩，次元・形，温度・湿度，量，味覚・嗅覚，音，力，速さ］，関係・比較に関するもの，価値につながるもの［総合的印象・可能

性・難易，外見，性格・能力・行為，物事の評価，精神状態］などの意味的タイプに分け，該当する形容詞を所属させている。分析の包括性は，分析の恣意性を防いでくれる。そのことによって，本論文は堅実な論文になっている。

考察対象として取り上げられる用例の豊富さ・多様さは，論が偏ったり一方的になったりすることを防ぐ，という立論の確かさを支えてくれる。本論文は，豊富で多様な用例を考察対象の俎上に乗せながら，論を展開していっている。

形容詞の文法分析・文法記述は，今後に待つところの多かった研究領域である。そのような研究対象に対して，本論文は，語彙意味論という枠組みでもって全体を分析・記述しきっている。本論文は，語彙意味論を用いての新しい独自の提案の試みである。１つの理論的枠組みで考察対象を首尾一貫して分析・記述した点もまた，本論文の従来の研究に対する貢献の１つである。形容詞に対するこのような枠組みでの分析・記述は，かつて日本語文法研究では行われたことがなかった。そして，従来，語彙意味論では，形容詞の表すものは静止状態とされ，＜単一状態＞のみとされていたのに対して，日本語の形容詞を考察することによって，＜単一状態＞と＜複雑状態＞の２種の類別を設定し，それらに対する語彙概念構造を提案している。具体的には，対象の属性を表すBEという抽象述語を持つ＜単一状態＞を表す形容詞以外に，経験者の存在を含意するFEELという抽象述語を持つ＜複雑状態＞を表す形容詞を設定している。前者が属性を表す形容詞，後者が感情を表す形容詞になる。また，「それが私にとって悲しい。」のような感情形容詞の経験者と，「私にとって，このセーターは高い。」のような属性表現の評価者の，項か否かの確定の難しいことを認めながら，経験者は項としての存在であり，評価者は付加詞であると位置づけ，その確定化のための構文的・形式的証左の提出に努めている。そして，対象は内項として存在であり，経験者は外項として存在である，と位置づけている。

従来，形容詞は，感覚形容詞をも感情形容詞に含ませ，感情（感覚）形容詞と属性形容詞に二分する分類が主流であった。それに対して，本論文では，感覚形容詞を含め，狭義感情形容詞と広義感情形容詞の類と，広義属性形容詞と狭義属性形容詞の類との２類５種に分類している。前者は経験者を取る形容詞で，最も広い意味で感情形容詞として１類化されるもの，後者は属性形容詞として１類化されるものである。

従来も感覚形容詞などが，「僕は目が痛い。」のように感覚を表す場合，「あの注射は痛い。」のように属性を表す場合との双方にわたって使用されることは，広く認識されていた。本論文の優れた点のさらに１つは，分類を行うにあたって，なるたけ構文的・形式的証左を挙げながら，立論を行い，分類をしていこうとしている点である。たとえば，広義感情形容詞は，「この漫画はつまらなそうだ。」のように「ソウダ」の付加で＜対象の様態＞を表すことができ，狭義感情形容詞は，「??合格は嬉しそうだ。」のように，＜対象の様態＞を表すことができない。広義属性形容詞は，「太郎は本を難しそうに読んでいる。」のように，動作主認識の副詞的成分になりうるが，狭義属性形容詞は，「*太郎はボールを丸そうに眺めている。」のように，動作主認識の副詞的成分にならない。

形容詞の主な使われ方には，装定（連体），修飾限定（連用），述定（終止）の用法がある。従来は，装定，述定に考察が向けられることがあっても，修飾限定（連用）に目が向けられることはあまり多くはなかった。考察される場合，副詞としての考察がほとんどであった。本論文では，形容詞の修飾限定（連用）用法のあり方・異なりが，形容詞の下位類化に有用であることを明らかにし，従来看過されていた修飾限定（連用）用法への分析を深め，自らの形容詞の下位類化を補強している。たとえば，狭義感情形容詞は，「皆嬉しそうに見送った。」のように，主体の内面的状態のみしか表さないのに対して，広義感情形容詞は，「太郎は彼の話を面白く聞いた。」（主体の内面的状態）と，「彼はそれについて面白く説明してくれた」（様態）の双方として使用されうることを明らかにしている。

さらに，形容詞の修飾限定（連用）用法への考察は，副詞的成分への従来の分析・記述，分類に対して，再考を促す新しい発見を生み出している。具体的には，主体状態の副詞的成分のより詳しい下位類化を提案している。主体状態の副詞的成分を，まず〈主体の意図〉と〈主体の内面状態〉とに分け，主体の内面状態を，〈主体の心理的状態〉〈動作主認識〉とに分けている。「彼はご飯をおいしく食べた。」のような動作主認識の設定は，興味深

いものであり，従来にない新しい副詞的修飾成分の提案である。

本論文は，かなりの記述分量を有する大作ではあるが，記述の重なりが少し目立つし，先行研究への言及が少し多いように感じられた。この点がいま少し整理されれば，本論文は，さらにスマートで鋭いものになったろうと思われる。

しかしながら，上記のような問題点が存するにしても，本研究の目的は十分達せられており，今後に残された問題が存することは，研究の宿命であり，本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。